



東京大学駒場キャンパス正門



扉には旧制一高のシンボルだった「柏」の紋章が残る・・・

東京大学農学部正門

かつては旧制一高のキャンパスだった・・・



言問通り

左側は東京大学本郷弥生キャンパス



寮歌「嗚呼玉杯に・・・」 第一高等学校・旧制一高物語

本郷弥生町から駒場に移転、「東大教養学部」に：

「一高」といえば、かつて多数の逸材を輩出した旧制第一高等学校を指す。その沿革をみると、一貫して東京大学（旧東京帝国大学）の予備校として位置付けられてきた。

明治7年（1874）、官立東京外国語学校英語科の開校に始まり、官立東京開成学校普通科（予科）と合併して東大の予備門となった。その後、東大医学部予科を併合、東京法学校予科、東京外国語学校仏学および独学科を併合、明治19年（1886）帝国大学令・中学校令に伴う改正で、工科大学予科を併合、第一高等学校が生まれた。

明治22年（1889）、一ツ橋から本郷弥生町に移転した（現在の東大弥生キャンパス）。当時の木下廣次校長は学生自治を認め、自治寮を開設した。明治27年（1894）には高等学校令により第一高

等学校となり、修学期間は3年で、帝国大学の予科と位置付けられた。一部は法学・政治・文学、二部は工学・理学・農学・薬学、三部は医学であった。

校長を務めた方の中には、柔道を創始した嘉納治五郎（1893年の校長）、国際的な活動をされ、英文で「武士道」を著わした新渡戸稲造（校長として1906〜13年）ほか著名な方々が目立つ。1901年以降全寮制が確立され、全国から集るエリート男子が青春を過ごす自治寮は、その中核となつて核となつて独自の校風が生まれた。俗世間から隔絶した校風を誇る言葉が籠城主義であったが、校長・新渡戸稲造は、籠城主義が排他的になり、高慢になりがちであるとして諫めている。

それにも拘わらず、寮のストーム（他の部屋をおそつて問答をもちかけ、ときには説教するなど）、鉄拳制裁、デカンショ節を歌うなどは伝統的な行事となった。寮生が作詞、作曲した寮歌が生まれ、寮の記念祭では各部屋を思い思いの趣向で飾って、学生、招待客ともに楽しいときを過ごした。1902年の第12回記念祭で寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」が初めて発表され、寮歌を高吟し、青春を謳歌した。

嗚呼玉杯に —旧制一高の物語—

一高で起こった事件

インブリー事件 1890年5月29日、明治学院との野球試合の開催中に、明治学院の応援に来た神学教師ウィイリアム・インブリーに投石、負傷させた事件。

内村鑑三不敬事件 1891年1月9日、教育勅語拝戴式で講師の内村が敬礼しなかったため、辞任に追い込まれた。

藤村操の自殺 1903年5月22日、一高生・藤村操が「巖頭の感」の一文を遺し、華厳滝で投身自殺した。哲学的煩悶のための自殺として世間に衝撃を与えた。

謀反論講演 大逆事件の翌年（1911年2月1日）、弁論部大会で作家の徳富蘆花が『謀反論』の講演を行い、学生の感動を呼び、文部省との間で物議をかもした。

駒場への移転

昭和10年（1935）、当時駒場に在った東京帝国大学農学部の数地と本郷弥生町の敷地との交換が行われた。このころから軍色が強まって、軍事教練も始まり、自由の気風にも変化がみられた。駒場に向かうさいには、団体行動をもって行軍した。

そのあと東北、九州、北海道帝国大学が、それぞれ1907、1910、1918年に設立され、京城、台北（ともに日本の敗戦によって消滅）にも帝国大学ができたが、1931、1939年には、大阪、名古屋帝国大学がそれぞれ設立された。

東京帝国大学の初期のころ、教官として「大臣よりも高い」俸給で欧米の外国人たちが雇われ、カリキュラムはヨーロッパの大学に倣い、教科書は原書、授業もノートも答案も外国語という状態だった。そのため専門教育を受けるために、まず英語やドイツ語等の語学力が不可欠であり、これを身につける予備教育機関が必要であった。

一方明治27年（1894）の高等学校令によれば、旧制高等学校は、専門学科の教育を行なうと定義されていた。しかし但し書きによれば、帝国大学に入学するための予科教育機関と規定されていた。帝国大学への進学を保証する制度であり、エリートをつくる場であった。

旧制高校は、第一高等学校ほかの五校ではじまり、学生は英語・ドイツ語・フランス語のどれかを専攻し、一般教養科目を併せて履修した。最終的には全国に39となった旧制高校の中、明治期に創設された

学徒動員が始まり、旧制高校生の青春は大きく揺れた。一高の校長だった橋田邦彦は、医学者として著名だったが、近衛文麿、東条英機内閣の時代に、乞われて文部大臣をつとめ、終戦時に自決した。

戦後の校長、安倍能成は漱石門下で、幣原喜重郎内閣の文部大臣となり、天野貞祐は第三次吉田茂内閣の文部大臣をつとめた。矢内原忠雄は内村鑑三・新渡戸稲造の弟子で、一高の校長のちに東大総長となった。

昭和22年には東京帝国大学から東京大学になり、昭和24年（1949）、一高は東京大学第一高等学校と名前を変え、間もなく新制東京帝国大学の教養学部が生まれた。1949年7月から1950年3月の間一高と東大教養学部は同居していたが、昭和25年（1950）3月をもって、一高は消滅した。

1877年に設立され、当時は日本で唯一の大学だった「東京大学」は、1886年、帝国大学令の公布によって「帝国大学」と改称された。しかしその後、京都帝国大学（現在の京都大学）が設立（1897年）されたので、そのとき以来、正式名称が「東京帝国大学」となった。

第一高等学校から第八高等学校までの各校は、政財官界に卒業生を送り込み、後発の学校より優位に立つたため、特にナンバースクールと呼ばれ、それ以後の高校はネームスクールと呼ばれた。

ナンバースクール…第一高等学校が東京大学の教養学部となったように、多くは戦後新制大学が発足したとき、教養学部、または文理学部となっていて、第二高等学校（二高）は東北大学、三高は京都大学、四高は金沢大学、五高は熊本大学、六高は岡山大学、第七高等学校造士館（戦後は造士館をはずす）は鹿児島大学、八高は名古屋大学の一部となった。

ネームスクール…新潟、松本、山口、松山、水戸、山形、佐賀、弘前、松江、大阪、浦和、福岡、静岡、高知、姫路、広島、旅順（廃止）、官立富山各高等学校は、新制国立大学（最近独立法人となった）の教養、文理学部となり、また私立の七年制高等学校として、戦前は名門として知られていた武蔵、甲南、成城、成蹊高等学校は、それぞれ新制大学に移行している。宮内庁直轄の学習院の八年制高等科も、旧制高等学校と似たシステムをもっていた。

一高をはじめ、旧制高校は、わが国の新しい時代を創る魁けとしての役目を果たした。